美　術　科

# 学びの深まりが自覚できる
# 美術の学習指導を目指して

## ～試行錯誤の跡を可視化する取組～

附属函館中学校　冨　尾　　拓

## Ⅰ　はじめに

図画工作と美術の「特定課題に関する調査」の結果が平成２３年３月，国立教育政策研究所から公表された。全国規模の学力調査は図画工作では５１年ぶり，美術では初めての試みとなり，それぞれの教科の現状が明らかになった。これによると，児童・生徒の授業に対する意識は共に高く，興味や関心を十分に抱いていることがわかる。反面，中学校美術では「Ａ表現」の創作活動において発想や構想を活かし表現の工夫を取り入れることに苦慮している生徒が多いことが浮き彫りとなった。また，調査結果をうけて美術科の指導の改善に向けて４つが示されている。１つは，「形や色彩，材料などの感情効果を意識したり，イメージをとらえたりしながら，表現や鑑賞の学習を行うよう指導の充実を図ること。」２つは，「表現と鑑賞の学習を充実するために，言語活動を効果的に取り入れるよう指導の充実を図ること。」３つは，「生活を美しく豊かにする美術の働きを実感できるよう指導の充実を図こと。」４つは，「我が国や諸外国の美術や文化に関する指導の充実を図ることである。」[1] このことから授業においては生徒が表したいものをしっかりと主題化させる過程において，生徒のつまずきや状況の把握と個に応じた適切な指導，さらには学習評価を効果的に次へ生かしていく取組が求められる。また，美術科の指導の改善においては，平成２４年度から全面実施される新学習指導要領の改訂の趣旨とともに，内容をしっかりと踏まえて研究を進めていきたいと考える。

これまで本校では，新学習指導要領の趣旨を実現する教育の展開を念頭に，美術科における言語活動の充実，我が国の美術や伝統と文化に関する学習指導の工夫をしてきた。そこで本年度は生活の中で直接機能的に働く造形や美術の働きなどを実感できるよう指導の充実を図りながら，美術科でとらえる学びを見直したい。併せて学習評価の工夫を図る取組として，ポートフォリオ形式による制作過程（思考・判断し表現に至ったもの）の蓄積を心がけ，生徒の内から表現されたもののプロセスを可視化することで，生徒が何を考えどう試行したかを鮮明に見取りながら，題材ごとの長期的な生徒の変容を検証していきたいと考える。

## Ⅱ　研究の経過

美術科では平成２０年度から研究主題を「豊かな感性と創造性を身につけ，自己実現できる生徒の育成」として，新学習指導要領の趣旨を実現する教育の展開を意識した研究実践を進めてきた。初年度は美術科における言語活動に着目し検証を進めた。平成２１年度，平成２２年度は，国立教育政策研究所の教育課程研究指定を受け，我が国の美術や伝統と文化に関する学習指導に焦点を当てた。その主な取組として，１年目は，我が国の美術や伝統と文化に関する学習指導の工夫の中で，年間指導計画の見直し，題材開発，学習活動の工夫を検討してきた。年間指導計画の見直しは，これまでの計画の中に，我が国の美術や伝統と文化に

関する内容を充実させるため，各学年における題材の配列を見直し，発達段階や系統性を考慮しながら，３年間の学習で繰り返し意識を喚起させ，学習内容が定着していくことをねらった。また，題材開発では７つの題材を新たに設定した。各題材は，これまでの題材を踏襲しつつ展開の仕方を再構築したものや鑑賞の扱い方を工夫した学習活動を試案した。そして，学習活動の工夫では言語活動とその効果に着目し検証を進めた。２年目は，試案した年間指導計画をもとに，各学年の授業総時数を考慮し「表現」や「鑑賞」の授業形態のさらなる工夫を行った。そこで，４期にわたる生徒と教師によるカリキュラム評価を行いながら，生徒の実態や題材の達成状況を考慮しながら指導内容の見直しや指導方法の改善を行った。また，第２学年から第３学年への題材の接続を意識した授業の実践を中心に指導と評価を効果的に結びつけるため，生徒の自己評価力を高める授業構想を意識した。

研究実践の要点を整理すると，「我が国の美術や伝統と文化」に着目した学習指導では，新学習指導要領に示された〔共通事項〕を基軸に，表現と鑑賞との関連を図るなどの題材構成及び学習指導を工夫した。成果として，生徒の様相の変化及び記述内容からも「我が国の美術や伝統と文化」に対する生徒の意識に変化が見られ，我が国の美術文化に対する理解を深めること，我が国の伝統や文化を尊重する態度を育てる契機となった。また，言語活動を充実する観点から美術科の学習に即した言語に関する能力の習得と活用を図る取組を意識した。生徒自身が試行錯誤しながら感受し，思考・判断し，表現するといった一連の学習過程を重視することにより，主体的に学習に取組，豊かに表現したり自分なりに価値を判断したりする力を育てることができた。課題としては，興味や関心を今後も継続させ，さらに，知識の面だけではなく美意識の面を同時に育んでいくことが必要であると感じた。

検証の中で，第２学年，第３学年の接続を考えて取り組んだ２つの実践を終え，生徒に再び，我が国の美術の特徴を問う質問をしたところ，多くの生徒からあげられたものは，厳かな緊張感，繊細な感覚，簡素ななかの華やかさ，調和のとれた一体感といった美意識に迫る解答が目立った。また，制作においても，作品に対する細部にわたるこだわりや，丁寧な彩色の仕方，道具を大切に扱う態度などが見受けられるようになり，受け継がれて

**我が国の美術や伝統と文化　学習計画試案**

**第1学年**

**◎におい　生活に関わる文化（衣文化）デザイン④**

描く活動＋鑑賞『あさきゆめみし』日本の伝統色（配色）を探ろう

※古典文学に登場する人物の衣装に着目し，日本的な色やかたち（模　様）を意識させる

**第2学年**

**◎もてなし　生活に関わる文化（食文化）デザイン⑦**

描く活動＋鑑賞『函館べんとう』　～函館PR作戦～

※地域のよさや特徴を生かしたオリジナルの駅弁を考案し，そのパッケ　ージを考え，今の生活文化を見つめ直す

**◎うるわし　伝統的な文化　（伝統工芸）工芸⑩**

つくる活動＋鑑賞　『日本の美　世界の用』

～和紙を使って帽子の制作～

※素材（和紙）のもつ特徴を実感させ，造形表現を生かして，形体と色　彩，模様の効果的な扱い方を考える

**◎おかし　あたらしい文化（アニメーション）鑑賞①**

鑑　賞　『青い衣の少女』～日本のアニメーション～

※アニメーションの原理から，造形を中心に，現代の美術文化を学ぶ

**第3学年**

**◎しつらい　生活に関わる文化（住文化）鑑賞①**

鑑　賞『茶室』　～取り合わせの中に秘められた趣向～

※日本人のもつ美意識を茶室の鑑賞から感じとり，簡素で質素なわび・さびの世界観を考える

**◎うつろい　伝統的な文化（仏教彫刻）彫刻⑯**

つくる活動＋鑑賞『いのりのかたち』

※仏教彫刻の表現から，微細な表現へのこだわりや内面的な美しさを　感じとり造形的な美しさと精神的な豊かさを理解する

**◎よそおい　あたらしい文化（ファッション）工芸⑩**

つくる活動＋鑑賞　『ジャパンコレクション』和紙を使って

《共同制作》

※素材のもつ特徴を実感し，日本の美意識を現代に生かして，どう発信していくかを模索する

我が国の美術や文化に関する指導の充実

きた日本のよさや，精神性を重んじる感性など日本の美術に対する尊重の念が感じられる。また，題材における評価規準を見直し，生徒自身が自己評価力を高めていくための『制作の道しるべ』の活用は，教師も生徒も題材における目標をしっかりとおさえ，生徒への求める資質や能力を明確にイメージする上で有効に働いた。さらに完成した自分の作品に達成感や満足感を感じる生徒が増え，自分が表現したかった思いが形になっていくことへの楽しさと，作品を通じて伝えたい思いが相手に伝わるここちよさを感じることができていた。結果，美術に対する興味や関心，意欲における生徒の意識水準が上がった。また，一人ひとりの生徒が主題を追求するために授業内での対話が増え，お互いのイメージや意志の交流が盛んに行われた。

## Ⅲ　本年度の研究

### １．　研究の方向性

本美術科では，本年度「学びの深まりが自覚できる美術の学習指導をめざして」と主題を設定し，「試行錯誤の跡を可視化する取組」という視点で研究実践を進めてきた。生徒一人一人の発想・構想における思考の跡や作品等の鑑賞を通じて深まった価値感の広がりなどを可視化することを通じて，個々に応じた指導をめざし，生徒に学びの深まりを実感させていきたいと考える。

新学習指導要領では，基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させ，これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力をはぐくむとともに，課題に向かって主体的に学習に取り組む態度を養い，個性を生かす教育の充実に努めることを明言している。そこで本年度は，美術科における学力に着目し，「知識・技能」，「思考力・判断力・表現力」，「主体的に学習に取り組む態度」から美術科でとらえる学びを見直したい。併せて，生徒一人ひとりの学習評価を次の指導に生かしていくことで創造的な表現力を育てる指導の見直しと学習評価の工夫を図る取組を推進したい。

【教科研究仮説】
指導過程における生徒の学習活動での試行錯誤の跡を可視化することにより，生徒一人ひとりに応じた指導を行うことができる。

仮説の検証にあたっては，生徒自身が振り返りをもてる毎時間の自己評価の蓄積。生徒の思考のプロセスをたどるためのワークシートの開発。思考の過程をお互いに共有することで的確な指導と評価の一体化を図る教材開発を進める。また，生徒の発想を広げる手がかりとして，これまで成果がみられてきた五感を刺激するイメージ素材の活用とグループごとの話し合いを意識的に取り入れた共同制作という授業形態を意図的に設定していくことで，言語活動の充実を図り，その活動から思考力・判断力を見取りたい。このように，指導過程における生徒の学習活動での試行錯誤の跡を可視化することにより，思考の段階や生徒一人ひとりに応じた指導ができると考える。そして，生徒自身の思いが反映された造形活動のプロセスを体感させることで，学びの深まりを実感させ，表現することの喜びを感じさせたい。

### ２．　研究内容

(1)　美術科における学力の把握

学力の重要な要素として，①基礎・基本的な知識・技能の習得，②知識，技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等，③主体的に学習に取り組む態度の３つが位置づけられた。これを美術の学習指導から考えると，①感性や感覚，想像力等を働かせ，形や色彩等の性質やそれらがもた

らす感情の効果を理解し，発想や構想を基に表現の基礎となる知識や技能を身に付けたり，対象の見方や感じ方を広げたりする。②新たなよさや美しさを発想，構想しよりよく表現方法を駆使したり，価値意識をもった見方を深めたりする。③主題や目的をより明確にするとともによりよく美しくするために自らの表現を見直しながら見通しをもって追求したり，新しい価値を見いだそうと広く豊かに鑑賞しようとする。とおさえることが可能であろう。このように美術科における学習課程においては学力における３要素は複雑に融合して内在するものと考えられる。さらに，多様な働きをしながら深まっていくものであり，総合的に身につけさせていく必要があると考える。

また，その要素の中でみえにくい学力として，美術科における「思考力・判断力・表現力等」の把握が重要である。新学習指導要領において，「図画工作科，美術科，芸術科については，その課題を踏まえ，創造することの楽しさを感じるとともに，思考・判断し表現するなどの造形的な創造活動の基礎的な能力を育てること」とあり，「思考・判断し，表現する」ことが明確に示された。美術の学習は，「習得」したことを「活用」しながら思考力・判断力・表現力その他の能力を主体的，意欲的にはぐくむという順序だった進行がすべてではない。「習得」→「活用」→「探求」はあくまでも基本形であり，この矢印の反対方向によって学習が成立する場合もある。このように美術の学習課程での習得・活用による思考力，判断力，表現力等をはぐくむことの複雑さを踏まえ，個に応じて一人ひとりの学習の実現状況からとらえていくことが必要であると考える。

⑵　造形表現におけるポートフォリオの工夫

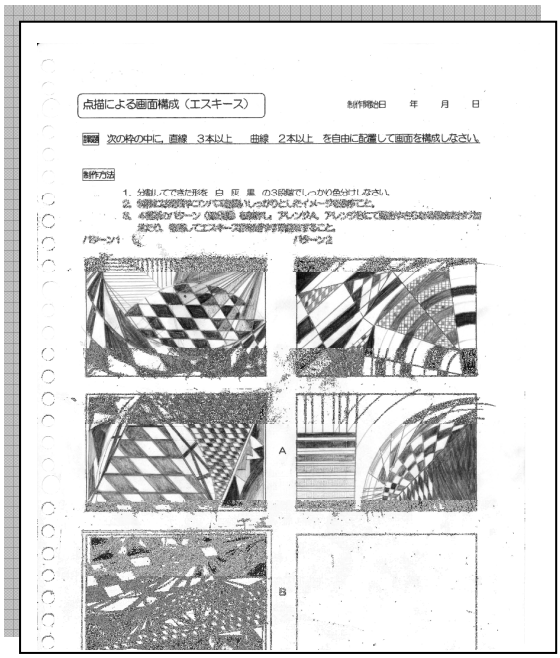
①試行錯誤を可視化する取組

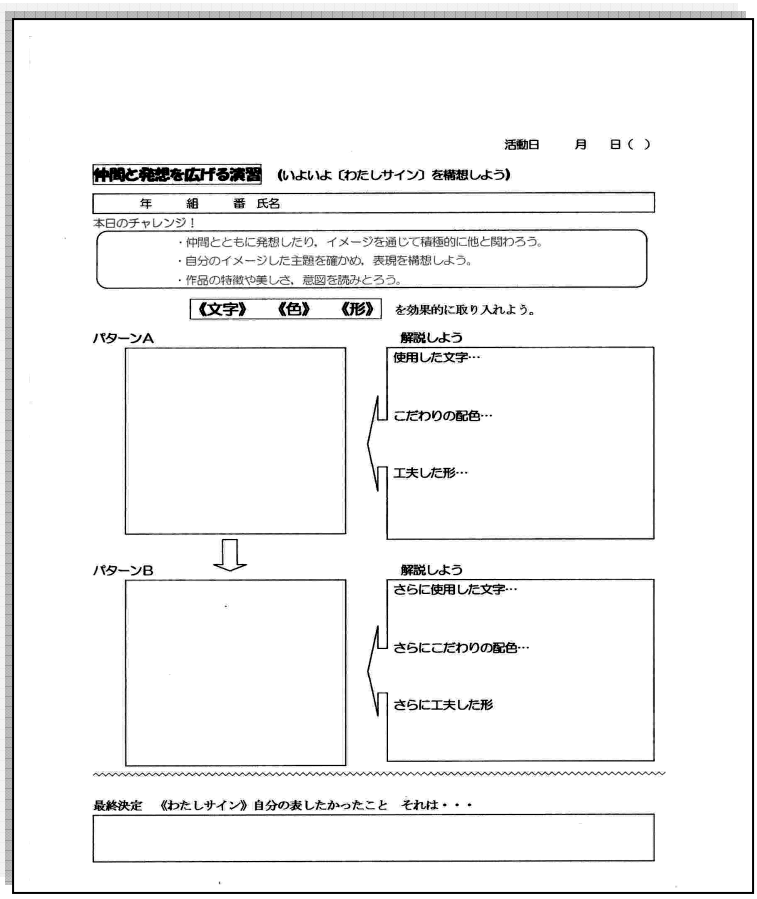
美術科における「思考力・判断力・表現力等」を考えたとき，その行為は一連の学習過程の総合であり，まとめて「造形的思考」と見ることができる。この造形的思考の跡を可視化することで生徒の学習状況を具体的に把握し，よさやつまずきに対する適切な指導ができるものと考える。そこでこれまで見取りにくい力とされてきた造形的思考（思考力・判断力・表現力等）の過程を可視化するために，美術科における学習活動と一体化したポートフォリオ形式の「制作のあしあと」を活用した。「制作のあしあと」にはこれまで授業終了時の反省の蓄積や整理を中心としたものであったが，学習活動の目標や過程，言葉や形を使って思考の跡を残す工夫をした総合的に学習過程が俯瞰できるワークシートの蓄積を心がけた。また，学習活動での発想や制作の手がかりなる「ためになるカード」の開発も始めた。

②生徒の思考のプロセスをたどるためのワークシートの開発

思考力・判断力・表現力等の育成は，鑑賞や表現の内容では抽象的な言葉を多用しやすく曖昧なものになりがちである。このため，発想や構想したことを形や色彩で表すことを始め，言葉で説明や思いを補いながら進めることで，今まで漠然としていた思いや感情に自分自身が気づき理解していく過程を大切にした。また，表現に至ったその過程を可視化したものを他者が鑑賞し，さらに鑑賞者が評価し自分なりの解釈を補うことで相互の学びの深まりを実感させることができるワークシートづくりを目指した。たとえば，１学年の発想・構想を広げる学習活動において，題材にあった様々な方法を紹介し，演習的にそのプロセスを体感させながら，生徒のイメージを表現させる工夫をした。言葉をつなぐイメージマップや形や色彩をつなぐイメージマップ。表現されたアイデアスケッチを〔さらに〕〔もっと〕といったキーワードでアレンジを加えさせ構成を練り直す工夫をした。また，自らのアイデアスケッチを言葉を使って解説していく取組（言語活動の工夫）により制作の思いを振り返り，問い直しを繰り返す工夫で感情の変化やアイデアの深まりを実感させたいと考えた。その他，ワーク

シートには《本日のチャレンジ》を記載することで，本時の学習目標を生徒に意識させた。




パターンやアレンジを広げるワークシートの工夫

③段階をおった学習の流れを明確にするために

ポートフォリオ「制作のあしあと」を生徒自身が活用していきやすいように，題材における授業構想を工夫した。自らの表現を追究したり，振り返りとして活用する場面において，総合的に学習課程が俯瞰でき，生徒が自ら主題を決定し表現を進めるヒントとなるよう， 題材の中に意図的に６つの学習プロセスを位置づけ，はたらきかけをしていくこととした。

**出会う**は，生徒の中に「なぜだろう」を芽生えさせ，問題を提起する過程とする。

**広げる**は，生徒の「こうしたい」を実現させるための問題解決にあたり必要とされる基礎的，基本的な知識や技能を習得していく過程とする。

**探　る**は，生徒の「もっと」を刺激し，問題の問い直しをし，生徒個々の追求を進める過程とする。

**深める**は，生徒の「なるほど」を増やし，仲間と問題を共有し，自身の価値観を広げ深めていく過程とする。

**創　る**は，生徒の「こだわり」を表現するために，これまで高め深まった知識や技能を活用し試行錯誤を繰り返す過程とする

**伝える**は，生徒の「さらに」を喚起させるため，振り返りにより学びに自分なりの意味を見つけ，仲間と共感する過程とする。

これらの構想は，制作過程や造形的思考のためのプロセスをはっきりとイメージさせていくことを意識し，段階における目的意識を明確にし，関連した演習課題を位置づけることで総合的な学習活動を支援するものとして工夫を図った。

(3)　研究仮説に基づく実践例

◆ **題材名　「 シンボルサイン」（第１学年）**

◆ **題材について**

本題材は，学級に飾るサインを制作するもので，授業形態を共同制作とした。自分なりの考えを持ち，他者の考えを共感的に理解していくことで，仲間と表現することの楽しさを味わわせたい。また，イメージをふくらませ形にしていくことのおもしろさや驚き，さらに，互いの協力で試行錯誤の末に表現された作品の美しさに気づいていくことをねらいとしている。

共同制作のための話し合い活動

◆ **最終指導目標**

| | |
|---|---|
| ○発想を大切にしてふくらませ，形や色のもつ色彩を効果的に使って自分たちの主題が美しく表現できるように構想を練らせる。　【発想・構想の能力】<br>○計画的・段階的に表現し，形や色彩表現などの表現方法を工夫し効果的に制作させる。　【創造的な技能】<br>○自他のイメージや構想を互いに批評し合うことにより，互いの良さや個性を理解し合わせる。　【鑑賞の能力】 | ○自らの考えや思いを表現していくステップから美の秩序や構成の基本・表現方法を理解させ，主体的に取り組ませ，興味や関心をさらに深めさせる。【美術への関心・意欲・態度】 |

◆ **指導計画**　（７時間扱い）

| 主な学習内容 | 指導内容 | 時間 |
|---|---|---|
| 題材と学習課題の理解<br>○出会う　鑑賞　・様々なサイン<br>○広げる　Step1 仲間と発想を広げる演習<br>・発想力の広がり（イメージ素材） | ・学習内容や表現方法について理解を深め，学習への関心，興味を持たせる。<br>（「制作のあしあと」記入　※毎時間）<br>・イメージ素材やワークシートを基に表現のための基礎・基本を理解させる。 | 1 |
| ○探る　Step2 発想を《ことば》にする演習<br>・発想から主題を導く | ・イメージ素材を通して発想をことばにすることで構想を豊かにイメージさせ，主題を明確にさせる。 | 1 |
| ○深める　Step3 発想を《かたち》にする<br>・コンセプトを基にしたアイデアスケッチ | ・表現意図に基づいた構成要素を工夫させる。<br>・素材や画材の特性を理解させる。 | 1 |
| ○創る　表現　・サインの制作 | ・分担や見通しをもって計画的に，丁寧に制作させる。 | 3 |
| ○伝える　鑑賞　表現を《ことば》にする<br>・表現の整理と振り返り | ・自分たちや他の班の表現の工夫を理解させ作品のよさやおもしろさを味わわせる。 | 1 |

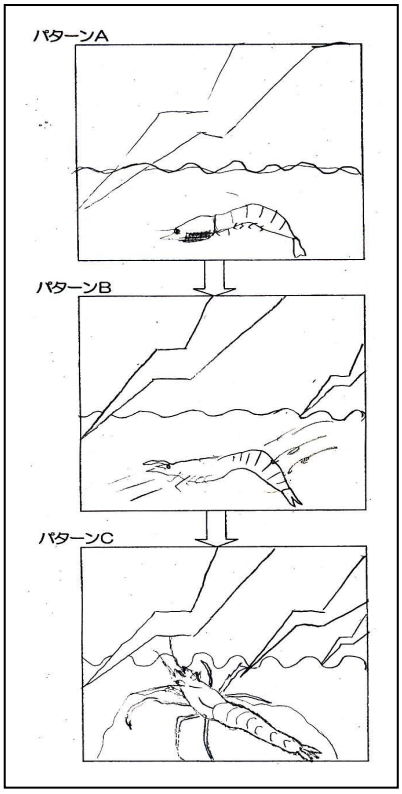
◆ **学習の展開**（一部抜粋）

| 学習活動 | 教師のかかわりと留意点 | 評価規準 |
|---|---|---|
| ○学習内容を確認する。<br>※「制作のあしあと」<br>○本時の学習目標の把握する。 | ○表現の方法と目的をしっかり伝える。<br>・参考資料の準備<br>○本時の学習目標を提示する。<br>※ワークシートの活用 | |
| グループでの交流を通じて，イメージをより鮮明に受け取り，発信しよう。 | | |
| ○さまざまなサインを鑑賞する。 | ○イメージにあった表現を見つけさせる。 | ○形や素材などの特徴や印 |

| | | |
|---|---|---|
| ○Step1 「仲間と発想を広げる演習」（ワークシート）を行う。 | ・表現のアイデアや意図を感じ取らせる。<br>○発想のためのテーマを伝え，グループで交流させる。<br>・グループでメンバー一人一人のイメージを共有する。（ワークシートの記入）<br>・イメージ素材の活用で五感を意識した発想の広がりを支援する。 | 象などから作者の主題や全体の感じ，よさや美しさ，心情や意図と創造的な表現の工夫などを感じ取ろうとしている。<br>【鑑賞の能力】（観察） |

## ３．　仮説の検証

指導過程における生徒の学習活動での試行錯誤（思考力・判断力し表現する）の跡を可視化する取組みは，これまで見取りにくいとされてきた思考力・判断力・表現力等の見取りの手がかりとして効果があった。まず，学習過程を「出会う」「深める」などのように段階を追って進めていくことで，一連のプロセスを可視化した。これにより，生徒に具体的な目的意識を持たせることができた。学習活動において教師と生徒が問題意識を共有することで，身に付けたい学習目標が明確となり，学習指導が効果的に働いたと考える。このことは生徒との学習活動における対話の中でも感じられる。これまで「どうすれば上手く描けるか」といった作品の出来映えを意識した質問が多かったものに対し，「柔らかい感じを出したいが何か良い方法はないか」といった，自分なりのこだわりや視点を大切に「～したい」という欲求が数多く見られ始めた。



エスキースの変化

また，生徒の思考のプロセスをたどるためのワークシートの開発は発想や構想の一連のプロセスを身に付けさせると同時に，指導の場面や段階に応じた生徒のつまずきに，教師も適切な支援が可能となり生徒の疑問や迷いに寄り添うことができた。右図は生徒が「光」「波」「エビ」の表現において構図を検討した跡である。パターンＡでは「光」の表現に助言を行い，パターンＢでは「エビ」の表現への助言を行った。結果最終的にパターンＣとして表現した過程である。発想の過程で生徒との会話（なぜという問いかけや生徒が表記した言葉による説明の部分を問い直しした）を通じて助言を行い生徒自身が納得のいく構成として表現している。生徒は自らの表現に自身を持ち，充実感をもって学習活動に臨んでいた。この他，これまで作品の交流に抵抗を感じていた生徒が，自分の作品を自ら仲間に提示する場面が見られるようになったことからも作品に対する思いが深まったと言える。さらに，ワークシートに記載された内容から，自分自身の言葉や造形的な言語が見受けられ，生徒の価値を広げるきっかけとなったことが読みとれる。主題設定においては，「何を表現しようとしたのか，自分なりの表現に意味が持てた。」制作過程においては，「常にどうしたいのかと自分に問いながら作品と向き合えた。」制作の自己評価においては，「自分の思考の流れを理解することで新たな気づきが生まれたり，仲間の思考の流れが感じ取れることで自己評価の内容も具体性がもてた。」「次回も頑張るという記述から，次はどうしたいというこだわりが増えた。」このように一つの題材を通しで生徒は多様な思考活動を展開させていたことが表出され，その思考活動に応じた指導の改善を工夫していくことは，生徒自身が学習目標の達成状況を把握していく上で成果があったことがわかる。

## Ⅵ　実践の成果と課題

個々の学びを深めていくために，「開かれた学力」を意識し，生徒自身による発見や気づきを重視し，仲間と共有しながら価値を広げていく授業展開を工夫してきた。可視化することを念頭においたポートフォリオ形式による学習内容の蓄積は，生徒に学習のプロセスを段階を踏んで学ばせたり，時には振り返らせながら問題意識を持ち続けさせることができた。

ポートフォリオ作成風景

また，言語活動を取りれた学習活動では，できあがった価値をもう一度問い直す機会として学習過程の中盤に位置付けたことで新たな価値を導きだし造形的思考を深めることができた。今回の実践を通じて，問題意識をお互いに共有することで学びの深まりが期待できることが見えてきた。と同時に生徒の試行錯誤の跡が可視化され始めたことで，そこには，問題を感じたり，発見する力をはじめ，仮説（解決策）を考える力，仮説にそって解決活動を展開するのに必要な力，課題の解決を振り返り・まとめる力の育成が必要であることが実感された。さらに，観察力（知識を知覚したり，想起・確認する力）推理力（分類，比較　関係づけ，解釈，応用等）人間関係的諸技能，メタ認知諸技能等，発達状況の把握が必要になってくる。また，思考的表現，技能表現のバランスを大切に進めることが必要であり，さらに，五感を活用する活動の工夫が美術科として求められるだろう。また，生徒の学びに還元される評価活動を実践していくためには，可視化したプロセスに適した指導と評価を行うことが必要である。中でも，思考力・判断力・表現力等を見取る取組は長期にわたる変容の観察が必要である。一人ひとりの状況に応じた適切な指導法については今後継続して検証を続けていく必要があるだろう。

## Ⅴ　おわりに

「確かな学力」は「習得，活用，探求」のバランスのとれた学習過程の展開によって身に付くとされている。美術教育では，この「確かな学力」に加えて，感性や情操といった「豊かな心」の育成を担う部分もある。そこには，習得した知識や技能を手段として使う習得→活用と言った学習のプロセスの他，試行錯誤や努力などによって新たな考えや，手だてを生み出す，活用→習得と言った学習のプロセスも考える必要がある。その過程では思考と同時に多くの判断が求められることとなる。そこには，必ずしも論理的思考がすべてではない。思いつきの直感的な思考や根拠のない判断といった行動的思考が必要になる。触覚や動作による知覚や心象が思考を活発化させ，知識や技能の働きも生かして新たな表現などを導き出すことができる。このように美術には喜びや驚きを含めた学びの深まりがある。よって，試行錯誤の跡を他者と共有していくことができれば，さらに表現に至る造形的思考を深いものにできるだろう。　　（文責　冨　尾　　拓）

＜引用文献＞

1）特定課題に関する調査（図画工作・美術）調査結果（小学校・中学校）国立教育政策研究所教育課程研究センター（平成 23 年 3 月）

＜参考文献＞

・評価規準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料（中学校美術）（平成 23 年 7 月）

・中学校学習指導用要領解説美術編（平成 20 年 9 月）文部科学省文部科学省

・中等教育資料　第 891 号（平成 22 年）ぎょうせい

・教育研究大会研究紀要(平成 22 年) 北海道教育大学附属教育学部附属函館中学校